

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：47110

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14194

研究課題名（和文）インクルーシブ保育に「前向きな態度」の形成条件に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Conditions for Forming a "Positive Attitude" Towards Inclusive Childcare

研究代表者

垂見 直樹 (Tarumi, Naoki)

近畿大学九州短期大学・保育科・教授

研究者番号：10581473

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：海外ジャーナルにおけるインクルーシブ保育に関連する文献をレビューした。障害児のみを対象とした日本の研究と異なり、文化的・言語的マイノリティなど多様な対象を含んでおり、日本における障害児保育への傾斜との差異を見出した。また調査研究においては、インクルーシブ保育に「前向きな条件」について、組織文化など組織全体を射程に収めることの有効性を見出した。また、子ども像を不断に刷新する「まなざしの可塑性」が保育実践を再構成する契機となり、インクルーシブ保育が、定型発達児向けの実践を温存するような見かけ上のインクルーシブ保育を解体する批判的契機となることを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、インクルーシブ保育に「前向きな態度」の条件が組織的条件に左右されるという仮説を質的な調査研究から見出したことである。具体的には、子どもの主体的な活動とインクルーシブ保育実践との親和性の高さに着眼する視点を導出した。また、インクルーシブ保育研究の今後の課題を文献研究から抽出することで、後続研究に寄与し得る成果を得た。

研究成果の概要（英文）：This study reviewed literature related to inclusive childcare in international journals. Unlike Japanese research, which focuses solely on children with disabilities, the reviewed literature includes diverse subjects such as cultural and linguistic minorities, revealing differences compared to Japan's emphasis on childcare for children with disabilities. The investigation also identified the effectiveness of encompassing the entire organizational culture when considering "positive conditions" for inclusive childcare. Furthermore, it highlighted that the "plasticity of perspective," which continuously renews the image of children, serves as a catalyst for reconstructing childcare practices. This approach demonstrates that inclusive childcare can act as a critical opportunity to deconstruct superficially inclusive practices that primarily preserve those intended for typically developing children.

研究分野：教育学、保育学

キーワード：インクルーシブ保育 事例研究

1. 研究開始当初の背景

de Boerらは、欧米・アジア・中東など16か国における26本の先行報告レビューで、各国の教師が、特別な教育的ニーズのある子どもたちのインクルージョンに「よくて中立的か、後ろ向きな態度を有している」とし、「前向きな態度」を見出せていない [de Boer *et al.* 2011: 331]。しかし、国内の保育現場を対象とした研究においては、インクルーシブ保育(統合保育)の経験が、保育者にポジティブな影響を及ぼすことが指摘されている[河内・福沢・濱田 2006、石井 2010]。これは、申請者がフィールドワークを通して得た実感とも重なる知見である。これまで「統合保育」として多くの障がい児を受け入れてきた保育者の経験への着目は、インクルーシブ保育に「前向きな態度」の解明の糸口となるのではないかと考えられる。

研究計画時の研究全体像は以下の通りである。

背景	目的・方法	達成イメージ(結果)
<p>インクルーシブな保育/教育の実現が社会的課題。保育者/教師の「態度」が重要とされる。</p> <p>学術的「問い」 インクルーシブな保育に「前向きな態度」の形成条件は何か？</p> <p>この問いが未解明である。</p>	<p>a. 保育者の「信念」の解明 b. 保育者の「経験」の解明 c. aとbの相互関係の分析</p> <p>フィールドワーク、インタビューによる質的データ分析</p> <p>独自性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「信念」と「経験」への着目により「前向きな態度」の条件にアプローチ。 ・申請者が所属する「地方私立短大」特有の地域の保育者ネットワークの活用。 	<p>・インクルーシブな保育に前向きな保育者像の可視化</p> <p>・「前向きな態度」につながる経験の条件と阻害要因の可視化</p> <p>波及効果(創造性)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育の質向上への新知見 ・保育者養成への応用 ・国連サミット採択「持続可能な開発目標」への保育/教育分野における貢献

2. 研究の目的

本研究の目的は、インクルーシブな保育に「前向きな態度」の条件として、保育者の「経験」と「信念」、また両者の相互関係を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) インクルーシブ保育の先行研究レビュー

インクルーシブ保育関連の文献レビューを行った。すでに先行研究の収集に着手している。雑誌論文を中心とし、海外ジャーナルからの文献レビューを行った。

(2) インタビュー調査を実施した。当初の予定では、協力の内諾を得た調査協力者に対するインタビュー調査を実施し、分析の基盤とする。非構造化面接を実施し、1人当たり5~6時間の音声データを収集する。その後、「雪だるま式サンプリング」において多くの研究協力者を獲得する予定であった。しかし、研究機関が covid-19 感染拡大期と重なったことで調査を実施することが困難な時期が長引いたため、研究協力者が所属する保育施設における質的なデータ収集に多くの時間を費やすこととなった。結果的に、エスノグラフィックな研究へと方針を転換することとなったが、研究協力者の新規獲得が困難な場合として、研究の申請時に想定していた事態であったため、円滑に方針転換できたと考えられる。

4. 研究成果

(1) 文献レビュー

海外ジャーナルにおけるインクルーシブ保育に関連する文献をレビューした。障害児のみを対象とした日本の研究と異なり、文化的・言語的マイノリティなど多様な子どもを含んでいる。また、保育者・保護者・子どもを対象とした研究や政策評価など制度面に着目した研究もある。

研究方法は、量的/質的な調査研究に加え、障害児と健常児に同一の介入をし、教育効果の比較を行うものや、インクルージョンの質を測定する尺度開発などバリエーションに富んでいる。研究知見には、実践的な示唆が含まれる場合が多く、保育者が利用可能な形で提示されている。

国内におけるインクルーシブ保育の今後の研究課題として、レビューを通して得られた知見を以下の通り列挙する。

発達成果に関する縦断的研究

障害のある子どもとない子どもの発達のプロセスに対する、インクルーシブ教育の長期的な影響を調査することが有効であると考えられる。多くの研究が短期的な成果に焦点を当てており、インクルーシブな実践の持続的な影響を理解するために縦断的な研究が必要である [Florian, L. 2015]。

効果的な専門性開発プログラムの開発

インクルーシブな環境での教師のための最も効果的な専門性開発プログラムを開発、評価する。多様な保育ニーズに対応するために、保育者の養成・育成の期間や内容に焦点を当てた研究が必要であると考えられる [Avramidis, E., & Norwich, B. 2002]。

インクルーシブな保育方法とカリキュラム設計

子どもたちの多様なニーズに対応するインクルーシブな保育方法やカリキュラムを開発する。養成課程における全ての学生や、現職保育者に対する研修プログラムにおいて、効果的に学習可能であり、Universal Design for Learning (UDL) の原則を取り入れたカリキュラムの設計と検証が必要である [Florian, L. 2015]。

家庭と地域社会の関与

インクルーシブ保育における家庭と地域社会の関与を強化するための方策について探求する。保育施設内部だけではなく、家庭や地域社会を効果的に巻き込む方法を理解することで、子どもたちへの総合的なサポートが提供され、教育成果が向上することが期待される。またこうした体制の構築により、保育施設外部におけるインクルーシブな環境の促進に好影響となると考えられる [Underwood, K. 2014]。

資源の配分と利用

インクルーシブ保育プログラムの質と、その「成功」に対する資源配分の影響を調査する。資金、専門家による支援、必要な資源がどのように配分され利用されているかを評価し、インクルーシブな実践をサポートするための最良の方法を特定する研究が必要である [Emam, M. M., & Mohamed, A. H. 2011]。

保育者の態度と信念

インクルーシブ保育に対する保育者の態度や信念、およびインクルーシブな実践を実施する意欲に影響を与える要因を研究する。ポジティブおよびネガティブな態度の決定要因を特定することで、認識を変え、インクルーシブな実践の実施を改善するための介入策を設計するのに役立つと考えられる [de Boer, A. A., Pijl, S. J., & Minnaert, A. E. 2011]。

社会的統合と仲間関係

インクルーシブな教室における統合の過程と子ども同士の関係のダイナミクスを明らかにする。ポジティブな仲間関係と社会的包摂を促進するメカニズムを理解するためにさらなる研究が必要であり、これらのプロセスを促進するための戦略を特定することが重要であると考えられる [Avramidis, E., & Norwich, B. 2002]。

インクルーシブ保育政策の分析

地方・国家・国際社会レベルでのインクルーシブ保育政策の効果を分析する。異なる政策枠組みの比較研究を通じて、成功した政策の要素を理解し、政策の設計と実施における改善点を明らかにする [Hemdan, M. H., & Mohamed, A. H. 2011]。

インクルーシブ保育が定型発達児に与える影響

インクルーシブ教育が健常児に与える影響を調査する。障害のある子どもたちへの利点は明示されるが、健常児の認知的、社会的、感情的な影響にも同時に焦点を当てる必要がある [Garry, W. 2015]。

インクルーシブ保育における技術介入

インクルーシブ教育を支援するための ICT 等の技術に関する研究を行う。多様なニーズを持つ子どもたちの学習とインクルージョンを支援するツールやリソースがどのように役立つかを明らかにすることで、インクルーシブな実践の効果を高めることができると考えられる [Hemdan, M. H., & Mohamed, A. H. 2011]。

(2) 調査研究

暫定的な結論

本研究課題における調査で得られたデータは報告の準備を行っている段階であり、研究期間内に成果として報告できていない。探索的な研究の過程で得られた暫定的な結果を述べれば、インクルーシブ保育に「前向きな態度」の条件として検討すべきは、保育者個人の信念や態度といった属人的な要因だけではなく、保育施設を取り巻く労働条件を含めた環境要因なのではないか、ということである。研究協力者であるインフォーマントはすべて保育者であるが、かのじょ／かれらとその所属する保育施設への調査からみえてきたのは、保育施設的环境によって、個人として優れた保育者であってもその信念や態度が保育の中で発揮できなかつたり、ゆとりや個人の裁量が大きい環境の中で、保育者がいかになく自身の信念や態度を具現化できている現状だった。

したがって、本研究が射程としたインクルーシブ保育に「前向きな態度」に関連する研究は、保育者の前向きな態度を促進する組織文化や組織学習環境、労働条件、リーダーシップの在り様といった、保育施設という組織全体を射程に入れた分析枠組みが必要であると考えに至っている。上記のような着想は、研究開始当初は想定しておらず、質的研究という仮説生成的・探索的な方法の特性上、研究開始後に得られたものであったため、適切な分析の枠組みや分析方法を準備することに一定の時間を要した。今後、研究期間内に得られたデータは組織文化論や組織学習論の枠組みを援用しつつ分析を行う予定である。

事例の検討

○問題の所在

本研究過程においてデータ収集をする中で、インクルーシブな保育に「前向きな態度」を形成し、その実現にとって重要であると考えられる事例を紹介し、考察を加えたい。

インクルーシブ保育は、多様なニーズを有する子どもたちと、定型発達児と呼ばれる子どもたちが同じ空間を共有することが想定される。すでに多くの先行研究で指摘されている通り、空間的統合が常に望ましいかは論争的である。統合への批判としては「投棄(ダンプ)批判」がある。ダンプとは、特別な教育的配慮なしに、同じ空間に多様な子どもを包摂することであり、これはインクルーシブと呼ぶことはできない。榊原は、障害者の社会的包摂を制度レベルでいかに実現するかの考察において、障害者の処遇における「同一/異別処遇」と、その効果における「包摂/排除」を組み合わせた四象限のうち「包摂的異別処遇」を擁護している〔榊原 2016〕。ここで擁護されているのは、空間的に統合をしつつ、特別な教育的配慮を実施するというあり方であり、本研究においても「インクルーシブ保育」とは、保育施設においてこのような状況が具現化されている実践を指す。ここで批判されているダンプは、見かけ上インクルーシブな保育が実現しているように見えるため、注意が必要である。

また、多くの保育施設においては、特別な支援が必要な子どもに対し、「特別支援加配」等の名称で、加配保育者が配置されていることも多いと考えられる。しかし、こうした措置についても注意が必要である。例えば、明らかに保育自体は「定型発達児向け」に構想・実践されており、加配保育者が特別な支援が必要な子どもを個別に担当するようなケースである。こうしたケースでは、特別な支援が必要な子どもは、クラス集団の他児が経験している保育実践からは切り離され、参画できていないことも考えられる。加配保育者の存在によって、ダンプとは断定しづらいものの、そうした実践がインクルーシブ保育と呼ぶことができるかどうかは難しい問題である。

ここで想定したケースの問題点は、加配保育者の存在を「隠れ蓑」として、定型発達児向けの保育実践が温存されてしまう点である。子ども理解や子どもの姿を通して保育を評価し、改善するというサイクルが起動する契機が失われることも考えられる。

○事例の概要

ある保育所における事例である。

5歳児クラスには、2名の特別な配慮を要する子どもがいた(女児A・男児B)。1人は自閉スペクトラム症の診断(女児A)、もう1人はADHDの診断をすでに受けていた(男児B)。女児はこだわりが強く、パニックになると泣き叫ぶなどの状況に陥ることが多い。男児は、保育中のクラスから飛び出すこともしばしばであった。

スポーツ大会における「たまいれ」の場面で、女児がパニック状態に陥った。きっかけは、女児が床に落ちているたまを拾おうとしたが、勢いよくたまに近づいたために、誤って足で遠くに蹴りだしてしまったことだった。クラスの他児は、たまいれに熱中しているため、女児に声をかける子どもはいない。しかしBだけが、競技中にもかかわらず女児が泣き叫んでいること、さらにその原因(たまを蹴りだして遠くに行ってしまったこと)に気が付いており、Aが遠くに蹴りだしてしまったたまを拾いに行き、Aに手渡した。周囲で見守っていた保育者の中には、Aが泣き出した時点で介入しようと腰を上げた保育者もいたが、状況を見守るといった判断をした。Bの行為は、そうした中で生じた出来事だった。

ある保育者へのインタビューにおいて、この場面を想起しつつ語られたのは、「私たちは、Bから学びました。ADHDの子どもは落ち着きがないと言われることが多いけど、実はADHDの子どもは気が利く子どもなんだ、ということです。だって、Aが泣いていることにあの時気が付いたのは、Bだけだった」という内容であった。

保育者はBの行為から、Bに対する見方のみならず、ADHDという障害イメージそのものの転換を行っている。こうした子どもへの「まなざしの可塑性」の高さは、保育実践を不断に再構成する契機となりうる。インクルーシブな保育実践が、包摂的異別処遇として具現するのみならず、定型発達児向けの実践を温存するような見かけ上のインクルーシブ保育を解体する批判的契機となる。

こうした保育者のまなざしがいかに生じうるのか、といった分析はまだ途上である。事例は、子どもの主体的な活動を重視する園で生じたことから、保育理念や方針と無関係ではないと考えられる。子どもの主体的な活動を重視すること、インクルーシブ保育との関連についても、検討されるべき多くの課題があるように思われる。

【参考文献】

- Avramidis, E., & Norwich, B. (2002). Teachers' attitudes towards integration/inclusion: A review of the literature. *European Journal of Special Needs Education*
- de Boer, A. A., Pijl, S. J., & Minnaert, A. E. (2011). Regular primary school teachers' attitudes towards inclusive education: A review of the literature. *International Journal of Inclusive Education*
- Emam, M. M., & Mohamed, A. H. (2011). Preschool and primary school teachers' attitudes towards inclusive education in Egypt: The role of experience and self-efficacy. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*
- Florian, L. (2015). Inclusive Pedagogy: A transformative approach to individual differences. *Scottish Educational Review*
- Garry, W. (2015). Evidence-based practice in inclusive early childhood education. *British Journal of Special Education*
- Hemdan, M. H., & Mohamed, A. H. (2011). Preschool and primary school teachers' attitudes towards inclusive education in Egypt: The role of experience and self-efficacy. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*
- 榊原賢二郎 (2016) 社会的包摂と身体—障害者差別禁止法制後の障害定義と異別処遇を巡って. *生活書院*. 346
- Underwood, K. (2014). Everyone is welcome: Inclusive early childhood education and care. *Canadian Children*

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 垂見直樹
2. 発表標題 インクルーシブ保育研究の論点と展望
3. 学会等名 日本保育学会 第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 垂見直樹
2. 発表標題 保育者になる過程 - 「地元」でつとめあげた保育者のライフヒストリー -
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 第30回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 垂見直樹
2. 発表標題 インクルーシブ保育の論点と展望
3. 学会等名 日本保育学会 第73回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 垂見直樹・池田竜介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 176
3. 書名 幼児教育・保育のための教育方法論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------